

## 《薬局サーベイランスコメント》

『冬季休暇の影響により、第 53 週のインフルエンザの患者数は減少。1 月以降再び増加してくるものと予想される』

2016 年 1 月 5 日

済生会中津病院感染管理室

安井 良則

### 薬 局 サ ー ベ イ ラ ン ス

(<http://prescription.orca.med.or.jp/syndromic/kanjyasuikei/index.html>) からの 2016 年第 53 週（12 月 28～1 月 3 日）のインフルエンザの推定患者数は前週（第 52 週）の値（30,540）よりも減少して 24,930 となりました（図 1）。これは第 53 週が冬季休暇と重なったことが大きく影響したためと考えられます。一方で、未だ学校の冬季休暇は続いているものの、休日明けの第 1 週の月曜日（1 月 4 日）の推定患者数は 12,594 と今シーズンでは最高値となり、今後インフルエンザの患者数は増加してくるものと予想されます。各都道府県別の第 52 週の人口 1 万人当たりの 1 週間の推定受診者数をみると、北海道、秋田県、沖縄県、大分県、東京都、福井県、長崎県の順となっています。

2015 年第 36 週から第 53 週までの累積の推定患者数は、142,488（約 142,500）であり、年齢群別では 40～49 歳（14.3%）、5～9 歳（13.8%）、30～39 歳（13.7%）、10～14 歳（10.8%）、20～29 歳（10.3%）、50～59 歳（9.4%）、15～19 歳（9.1%）、0～4 歳（8.7%）の順となっています（図 2）。成人層の割合が増加し、小児の割合が減少しているのは、やはり冬季休暇の影響があると考えられます。

国立感染症研究所感染症疫学センターの病原微生物情報 (<https://nesid3g.mhlw.go.jp/Byogentai/Pdf/data2j.pdf>) によると、これまでのインフルエンザ患者由来検体から検出されたインフルエンザウイルス（235 検体解析）は、A/H3（A 香港）亜型 44.3%、A/H1pdm 28.1%、B 型 27.7%の順であり、ここへきて B 型の割合が増加してきています（図 3）。

第 53 週のインフルエンザの推定患者数は前週よりも減少しましたが、これは冬季休暇の影響が大きく、1 月以降は再び増加してくるものと予想されます。今シーズンの患者発生の上昇は、過去 5 シーズンと比較して最も遅いですが、ここへきて B 型インフルエンザの割合が高くなってきており、B 型が流行の主体となって流行のピークも 2 月の中旬以降となる可能性もあります。インフルエンザの患者数の推移には今後とも注意深い観察が必要です。

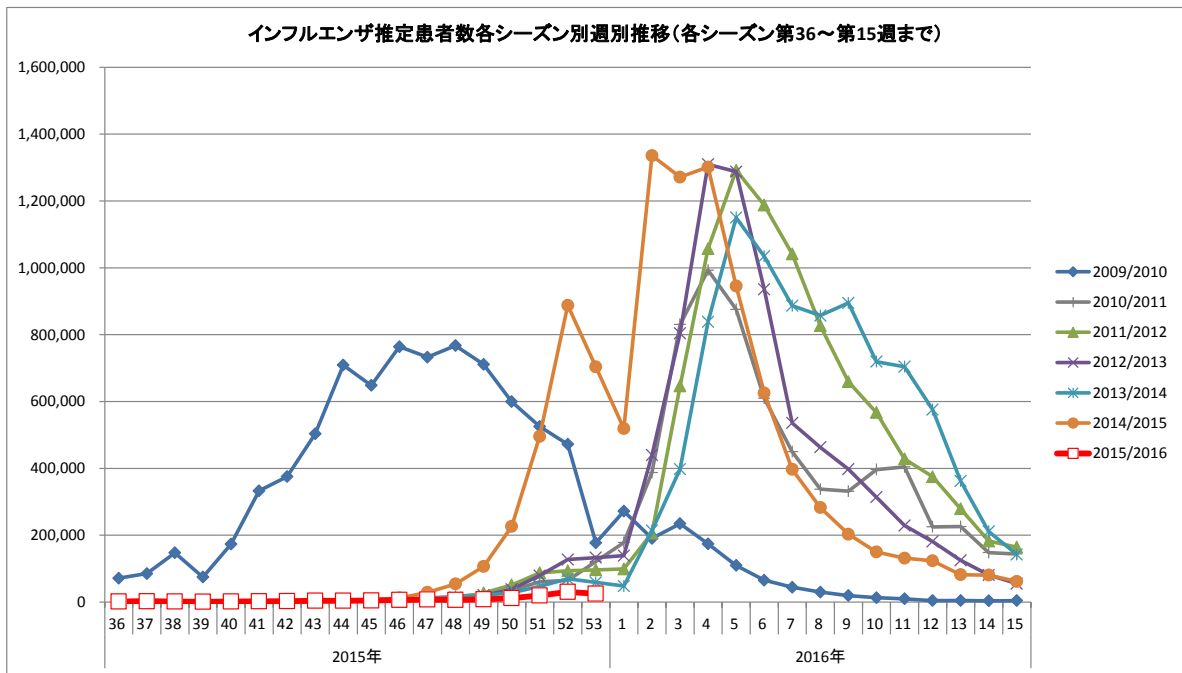


図 1. 過去 5 シーズンと今シーズン（2015/2016 シーズン）の第 36～52 週までのインフルエンザ推定患者数の週別推移

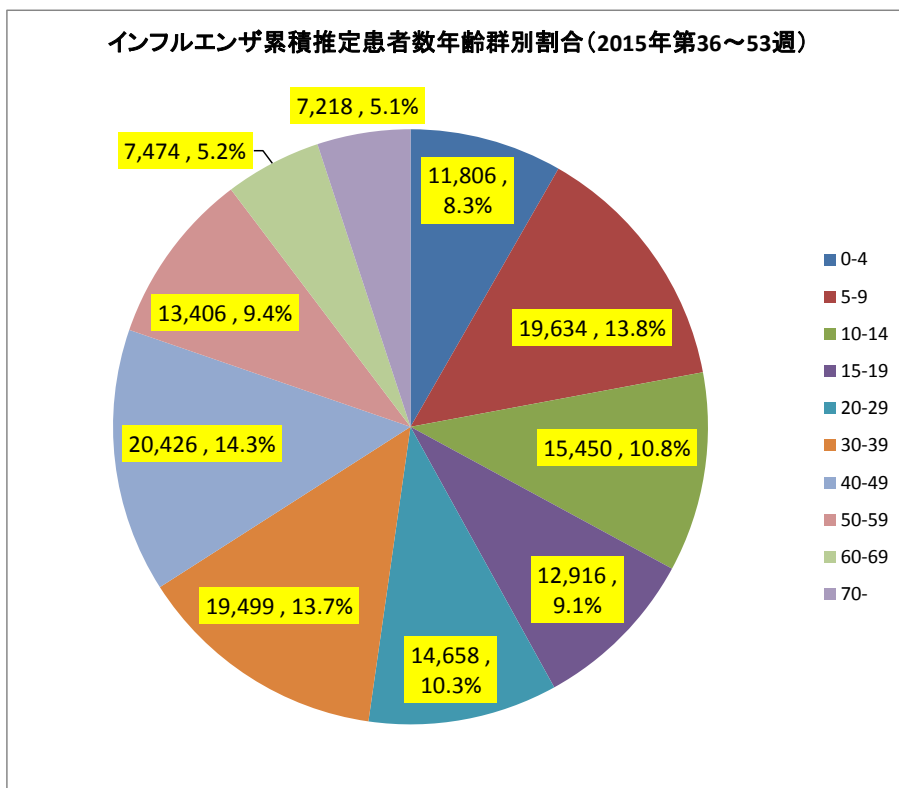


図 2. インフルエンザ累積推定患者数年齢群別割合（2015 年第 36～52 週、累積推定患者数=142,488）

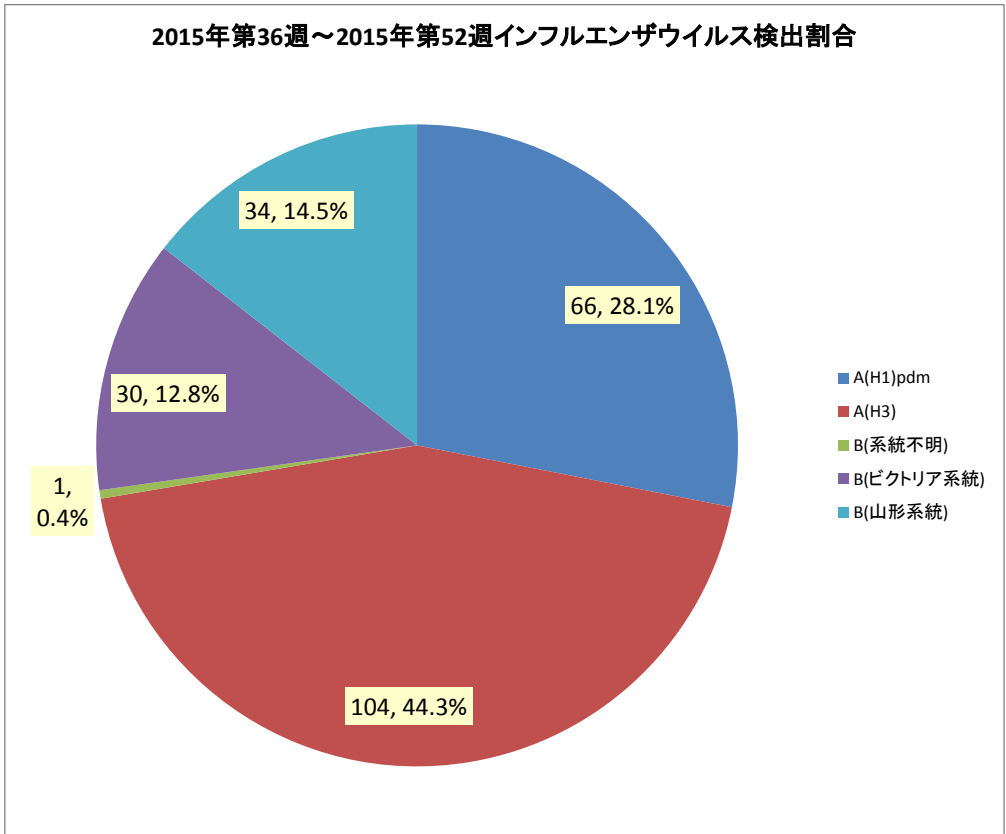


図 3. 2015 年第 36～50 週インフルエンザウイルス検出割合（総検出数=235）